

# 草庵仏教

第107号  
(発行日)  
1999年5月1日  
(発行所)  
真宗大谷派 念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人)  
土井紀明

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋仏壇店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## エピクテトスに学ぶ

一、あるお札  
母が亡くなってもうまる十年になりませんが、亡くなる前、病院に入院していた頃、母の女学校時代からの親しい友人が見舞いに来てくださいました。そのとき、一つのお札を置いてかえられました。それは奈良の一言観音のお札でした。私は真宗門徒ですから、お札類はもらいませんし、またたえももらいませぬ、飾ったりはいたしません。しかし、母の病気の回復を心から願って下さるお友達のやさしいお心を思い、母の枕元にしばらく置いていました。

その一言観音のお札というのは、一言(一事)だけの願いはかなえようという観音様だということです。

世間の多くの人たちは様々な願いをかなえてもらいたいというので、神社仏閣によくお参りしますが、この観音様は一事だけは願いをきいてくださるといふことで、かえつて効験がありそうだとお参りが多いそうです。一言観音社というのもあるそうです。

二、ただ一つの願いは何か  
ここで面白いのは、「あなたの願いを一つだけかなえてあげよう」といわれたら、人は何を願うかという事です。ただ、「すべて」の願いをかなえて欲しい、「すべて」の願いをかなえずし、「一言観音さん」で一つ

の願いを、一言神社では他の願いをというのもエラーです。「あなたの人生で、事だけ願いをかなえるから、その願いを言ってみよ」と言われたら、さて私は何を願えばいいのでしょうか。これはなかなか難しい問題だと思います。たとえば「長生きさせてください」と願えばそれによいのか。ただ寝たきりのようになっても長生きさせればそれで満足か。あるいは「健康でありさえすればいい」とか、交通事故で短命で終わってもはたしてそれでかまわないか。「金持ちでありさえすれば」と願っても、到底それだけでは落ち着けない、など。

何か具体的にひと事の願いと言われると何を實際願っているかわからなくなるのです。

三、一言観音の意味  
この観音様は、私たちに「あなたはこの人生に何を願って生きるのか、何を本当に求めているのか」と問うている観音様だともいえます。もしこの問いを我が身の問いとして、私の願いの根源を明らかにしようとする縁となるならば、この観音様は充分なはたらきをしていてくれると思います。

人間は自分の本当の願いがわからないうちに、いつまでも迷っているといえましょう。

四、私の願い

もし私に「あなたは何を願いますか」と問われたら、「まことの智慧を与えて下さい」と願おうと思います。

「病気になるっても、貧窮しても、周りから見放されても、もうしばらくのいのちとなっても、どんな状況が降りかかってくるかも、それらを受容し、それらに大事な意味を見出し、それによってより豊かな人生を切り開くような、そういう智慧が欲しい」と願ってみようと思えます。

そういう智慧を真宗では、転悪成善あるいは転悪成徳の智慧ともうします。そういう智慧をどうする智慧があれば、この人生はどうなるうとも、どつちえ転んでも、満足して生きていけそうですから。

転悪成善とは、悪を転じて善となす、また転悪成徳とは、悪を転じて徳となすという意味です。

こういう智慧こそ、人は急いで求むべきものではありませんか。こういう智慧がわかないで、いろいろな枝葉の願いをかなえようとして、あれを求めこれを求めて、つい人生の時間切れで、安心も満足も得られずに一生が終わるのではないのでしょうか。

五、エピクテトスの智慧  
西暦五百年頃から一三五年頃、古代ローマにエピクテトスという賢者がいました。この人の生き方や言葉には大変な教えられるものがあります。かれは次のようなことを言っています。

「子供が旅立ったとか、自分の財産を失ったとかして、人

が嘆き悲しんでいるのを見て、あなたたちはその人は不幸な目にあつたなどと思わぬように注意したまえ。そうではない。『この人を悩ませてくるのは、死とか貧乏とかの出来事ではなくて、そういう出来事に対する思いなのだ』ということを心がけておきたまえ。しかし、言葉のおよぶかぎりは、その人に同情することをためらうな。そういう場合は、いっしょに嘆くのもよろしい。だが心の底から嘆くことのないように、注意するがよい」と。

ここでエピクテトスは、子供の死とか破産とか、そうした出来事が人間を嘆かせたり不幸におとしめたりしているのではない。そういう出来事にたいする私の方の「受け取り方」「考え方」「理解の仕方」「ものの見方」が自分を不幸にしている原因なのであると、いつているのです。

身の上の降りかかってくる出来事をどう理解し、どのように考え、いかに受け取るかは、人それぞれの自由であり、それゆえに私の責任でありま

### 【 電話相談室 】

(秘密厳守・匿名可・無料)

(時間)

午前8時より午後10時まで

(電話)

0798-41-5346

(相談内容)

人生上のいろいろな悩み・  
信仰上の相談・仏事の相談  
\*相談員が留守のときがありますので予めご承知ください。

す。出来事をどう理解し、どう受け取るかという、そこに智慧があるかないかが、人生の不幸の大きな分かれ目になるのです。智慧がなければ、嘆いたり怨んだり失望したりすることからいつまでたつてもまぬがれません。それは智慧がないからであります。エピクテトスの語録に、「なにごともしはそれを失った」などというな。『お返しした』といえ。  
「子どもが死んだ」  
「神が取り返されたのだ」、  
「神が死んだ」  
「神が取り返されたのだ」  
「土地を失った」  
「神が取り返されたのだ」。  
神がそれらをあなたに与えているのだから、あなたはそれらを自分のものと思わずに世話をすればいい。あたかも旅人が宿屋でそうふるまうように。

「心づかうのと智慧ある人との違いは、たとえば心づかう人が『ああ、私は子どもや兄弟のせいで不仕合せだ』。ああ、親父のせいで不仕合せだ』。強いて『ああ、私は不仕合せだ』といわざるをえないとすれば、じつと考えてから『私のせいで』というのである。思い通りにいかないとき、自分を責めて、『生活上の混乱や動揺の原因は私自身の迷惑以外のなにもでもない』と思おうほどになれば、私らは成長したことになる。」  
人は、我が身の不幸を他者のせいにして、智慧のある人は、幸せと不幸は自分に責任があると了解するのだ、と。  
またこんな言葉もあります。「他者から侮辱されたとき、あなたを侮辱するものは、あなたをのしつたり、なぐつたりする者ではなくて、これらの人から『侮辱された』と思う、その『思い』があなたを侮辱したのだ。  
誰かがあなたを怒らすならば、あなたの考えがあなたを怒らせたのだと知るがよい。」  
侮辱されたと思う、その思いが自分を侮辱するのであって、他者からどういわれても、それを侮辱と受けとるかどうかは私自身の事柄である、と。  
このようなエピクテトスの言葉は、仏教の教えに通じるものがあります。一切の出来事をどのように受け取り、どう感じるかは、それによつてどう行動するかにもかかわる。人の基本であり、私が一瞬も避けることのできない自身身の問題です。

### 六、念仏の智慧

以上のように、死ぬこと、老いること、病むこと、財産問題、人間関係などに、私はどう対処しているのか、そこに智慧があるかないかは、人生のきわめて大事なことから。「あの人は私のことを悪く言うので腹が立つ」というささいな問題でも、悪くいう人、腹が立つだけでしかないか、それともいったんは腹が立つても、お念仏の智慧に照らされて「いやいや、あの人が私を悪く言う以上にもつと悪いのが私。悪く言われて当然。阿弥陀仏は私のことを極重悪人と仰せられる。」とか「悪く言つてご意見下さればこそ、少しなりとも我が身の姿を知らしていただける。」とか「腹立つ煩惱の深さを知らされました。お念仏のご縁を頂きました。」というように自然に受け取られてきて、腹立ちもやわらぐのはお念仏の智慧のお徳であります。  
お念仏の智慧には、「悪を転じて善となす」はたらきがあります。この場合の善悪は宗教的、倫理的、禍福を含む。転悪成善の智慧は、不仕合わせとおぼしきできごとを、良きことと受け取る智慧であります。  
この智慧こそ私どもが求め願うべきものではないでしょうか。それを求めずにただ不運を逃れ幸運の来ることを祈るなら、私たちは運命の奴隷にならねばなりません。エピクテトスの語録に  
「わしらは、ただ一つのこと（智慧）に気をくばり、心を寄せねばならないのに、かえってそれ以外の多くのことに気をくばっている。つまり、肉体や、財産や、兄弟や、友人や、子どもなどに縛られたがっている。かくして、わしらは多くのものに縛られるから、それによつて重苦しくされたり、引き倒されたりするのだ。」  
多くのことに気を配っているさまは、ちょうど航海に出て、都合の悪い天候であるなら、座りながら、たえず風の様子を見ていようなものだ。



艾菊

「何風がふいているか」  
「北風だ」  
「いつ西風が吹いてくれるか」  
「それは西風の気が向いたときだよ」  
風向きは、わしらに、何かかわりがあるか、わしらの自由になる権限内のものではない。  
「では、どういうふうを受け取ったらいのか」  
神が欲するように、ということさ。」  
「風は吹いてくは、人間の側の思い通りにはならない。自由にならない風向きなのに、風向きの方向によつて一喜一憂しているのは、智慧のない人の姿だと、かれはいうのです。思い通りにならないことを何とかしようとして、どうにもならないで苦悩している私たち。どうにもならないことをどう受け取るか、それこそ私たちの心を砕かねばならない点です。」  
(文・土井)

# 真宗教学講座

善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや。しかるを、世のひとつねにいわく、悪人なおもて往生をとぐ、いわんや善人をや。この条、一旦そのいわれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆえは、自力作善のひとは、ひとえに他力をたのむところかけたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、眞実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死をはなることあるべからざるをあわれみたまいて、願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おおせそつらいき。

## (第 十 一 講 義)

(歎異抄第三章)

〔現代語訳〕―善人ですら往生をとげるのです。まして悪人が往生をとげられないことがありましょか。しかるに世間の人は常に、悪人ですら往生するのだから、まして善人が往生しないことがあろうか、といつています。この考え方は、一応もつともなようです。阿彌陀仏の本願他力の救いのみころには背いています。

そのわけは、自力をもつてなした善行をたのんで往生しようとして、自力をよつてなした善人は、阿彌陀仏の本願他力だけを、ひとすじにたのみ、おまかせをするという信心のない人ですから、本願のみころにかなひません。けれども、そういう人も、わが身の善をたのみ自力の心を改めて、阿彌陀仏の本願他力をたのみ、おまかせするならば、本願力の御はからいによつて、眞実の悟りの境界である眞実報土に往生をとげさせていただくことができます。

にまかせきつてゐる悪人こそ、第一に往生すべきものです。それゆえ、善人でさえも往生させていたたくのだもの、まして悪人はなおさらのことであると、仰せられたことでした。―

この章は古来「悪人正機」説で有名です。「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」とは、善人ですら往生をとげるのです。まして悪人が往生をしないことがあるか、という意味ですから、この言葉は、表面的には過激な表現です。けれども、この章の全体の内容から読めば、決して破天荒な内容ではなく、自然にうなずけるものです。

ここでいう善人とは、一般に言われる善人とは意味が違い、この章のなかに出てくる自力作善の人のことです。

それについて、親鸞聖人のお手紙には「自力と申すことは、行者のおのおの縁にしたがひて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わがみをたのみ、わがはからいのころをもつて、身・口・意のみだれごころをつくり、めでとうしなして、浄土へ往生せんとおもうを、自力と申すなり」とあります。すなわち、浄土に生まれようと願つて、さまざま縁で、阿彌陀仏以外の仏名を称えたり、布施行や戒律行や座禅行など、阿彌陀仏の浄土に生まれるのに正当でない雑多な行を行い、自らの力をたのみとし、自らがなした修行の功德や力によつて、浄土に生まれるのにふさわしい立派な者となつて、浄土に生まれようともくろむのを自力というのだと、聖人は仰せられています。

浄土に生まれたいために、このような善行を行おうとするのは一見、何も問題はないばかりか、まことにすじのとつたことのように思われます。

しかし、善い行いをして、自分を浄化し、それによつて永遠の幸せを得ようとするのは、自らの善い行いによつて、広大な利益と安寧を得ようとする、だてていることといえます。そこには、自分に執着し、利益と安全を確保したいという功利的な計らいがあると思ひます。

布施行をするのも我が身が浄土に生まれんがため、慈悲の行いをするのも我が身が助かるためということになり、他者の苦しみに共感し、「なんとかしてあげたい」という、他者へのやさしさからおのずと発動する慈悲の行いではなく、我が身が永遠の

救いにあずかりたい、あるいは阿彌陀仏のお護りをいただきたいという、畢竟我が身の利益ために行う慈悲行為であります。

このように自力作善には、自分を高め、それによつて永遠の幸せを得たいという、そのことの中に自我愛、自己執着があるのではないでしようか。

オウム眞理教の人たちが、「修行して超能力を身につけたい」といつていました。そこには、どこまでも自分を輝かしい、自他の目にも「めでたい（すばらしい）」人になり、自分を特別なものに仕上げようという、そういうはからいの心があります。その志の中に、深い自我愛を感じるので、禅の修行でも、そうした修行は批判されているようです。曹洞禅で有名な内山興正老師が

「どかーんと一発悟つて、大安心した偉い人間になつてやろう」というようなことで行う修行は、眞の修行ではない。そういう線上に悟りなどないのである。(撃ち方やめ)で、悟りをねらつての修行がすたつたところむしる道が開けるのである。」といつておられたことを思い出します。

自力作善は、私たちの心に染みついてゐる「善を行えば功德や福が与えられる。悪をなせば罰や禍いがもたらされる」という功利的な考えともいえます。

第二に、自力作善の生き方には、自分の能力への過信があると思ひます。

努力すれば眞実を得ることができ、努力すれば自己浄化ができる、努力すれば永遠の救いを得ることができるといふように、自分の力を買いかぶつてゐるのです。習字の練習に努力すれば、達筆になれるとか、ピアノの練習にはげれば、ピアノになれ、救いとか自己浄化という眞実清浄なるものを獲得したいといふようなことになり、はたして凡夫の努力で可能かどうか。

自力作善の人は、自分の能力の限界を知らず、「やればできる、なせばなれる」といつてだけ、たよりに眞実の領域に達しようとして、いつまでも途上で足踏みをしてゐるといえます。ですから、はやく自分の力の限界に気づきなさいと聖人は仰せられています。教行証文類の化身土巻には、

「濁世の道俗、善く自ら己が能を思量せよとなり。」(濁つたこの世の出家者も在家の者も、自分の能力の限界をよくよく思ひはかりなさいと先人が仰せら

れています。

「自分のありのままの姿は、煩惱を離れることのできない不真実な人間（悪人）であります。そのような自己であることを知らない無知と「我に力あり、我は善きものなり」という驕慢心が自力作善の心であります。」

第三に、自力作善の人は、自分の修行によって、自分を救おうとするのです。自分で自分を支えようとしていくといつていいと思います。

こういう考えは、今日の私たちは当り前のよう思っています。

「自分の幸せは自分の努力によって築くものであり、自分を救うものは自分自身であり、自己の行いが自分の根本的な支えである。」

ところが、真実は、

「自分の幸せは自分が築こうと計らう前にすでに本願力によって、いただきさえすればよいように、私たちに恵まれている。自分を救うものは阿弥陀仏の本願他力であり、私の根本的な支えは阿弥陀仏である」ということです。ですから、自分の修行や努力によって自分を支えまた救おうとするのは、阿弥陀仏を無視し、阿弥陀仏のご恩をないがしろにしていることとなります。歎異抄にも

「まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひともしあしということばのみもうしあえり」といわれ、私たちが自分の行いの善し悪しにこだわって、阿弥陀仏のご恩を無視していると嘆いているのです。

自らの能力では浄土に生まれることも、自分を浄化することも、あるべき状態に変革することも到底できるものではないと、自分の能力の限界を知り、自分を「どうしてみようもないもの」（悪人）と見限って、阿弥陀仏の「我にまかせよ」という仰せられる大いなる力に身を全くゆだねる人、こういう人を「他力をたのみたてまつる悪人」といいます。

悪人というのは、自らの悪業・煩惱ゆえに、救いきえしき自分だと、自分を見限った人のことです。この悪人は、仏の本願の思召しがまさに己のためであることを真正面からいたいただき、浄土にまっすぐに生まれゆく人であるといわれます。弥陀の本願

のお目当ては、救いなき悪人であり、救いなきものをこそ助ける本願によって、万人の救いを成就されたのが阿弥陀仏です。なぜなら、「人は、どこにも救いがなくすでに破綻している」と観られたのが阿弥陀仏です。聖人は「信巻」に次のように仰せられます。

「一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚偽諂偽にして真実の心なし。」（一切の生きとし生けるものは、はじめなき昔より、今日ただ今まで、煩惱に汚れはてて、清らかな心もなく、うそいつわりやへつらいばかりで、真実の心は少しもない）

このように人間のありのままの現実を知りぬいて、すでに破綻している人間を、それゆえ万人を、救わんと立ち上がられたのが阿弥陀仏です。

この悪人は「私の力では全く救いがありません。」と知って、阿弥陀仏に我が身の救いをおまかせしているのですから、本願の御心にかない、本願の救済にまっすぐ応答しているのです。

ところが、自分で自分を救い得ると思っている人は、阿弥陀仏が「助からぬものを助けよう」との本願には相応しないのです。

たとえば、深い山に迷い込んで、道を見失ってさまよい、歩き回って疲れ果て、倒れ込んでいる人に、親切な人が来て、「自動車であなただけを迎えに来たからすぐ乗りなさい、里まで運んであげるから」といわれたら、「ありがたう、お願いします」と、すぐに自動車に乗ります。ところが、山で迷っても、まだまだ自分の足は大丈夫、まだ自分の力で何とかなると思っている人は、「乗りなさい」と親切にいわれても、すぐには乗りません。それと同じで、自力無効となつた悪人は阿弥陀仏の本願をそのまま即座にいたたき、阿弥陀仏に身をゆだね、まっすぐに浄土に往生せしめられます。しかし、自力過信の善人は、阿弥陀仏の本願を直ちにいたたかぬゆえ、すぐには浄土往生はできないのです。

けれども、自分の能力の限界を知って、「もはや自分の力ではいささかも救いはありえないし、ちつとも進むことはできない」と、自分の限界にぶつかつて、自力をたのむ心が砕かれ、自力の心をひるがえして、本願他力をたのむとき、その時、往生浄土の道が開かれるのです。ですから、自力作善の善人は自力の限界にぶつかつてでないと道が開けない点、遠まわりなのです。

ただ、救われたいと願って、自力を励む人にも、「どこまでも救わずにはおかない」という大悲の願心がかけられていますから、自力の人もついには自分の力の限界を知り、同時に阿弥陀仏の本願の深くて広いお心を知って、本願を一筋にたのむようになるのです。これは阿弥陀仏の大悲方便のおかげによるのです。

ですから、自力の善人もついには浄土に往生する、まして他力をたのむ悪人をや、といわれるのです。

なお、自力作善の姿は、人生全体のありかたにも現れています。

私たちが学問をし、才能を磨き、個人的な能力を高め、それによって価値ある人間となり、社会的に有用な人であるうとし、そのために懸命に努力することによって、自分の人生に富と名声と安全を得ようとする、そういう生き方がいわば自力作善の生き方です。自分の描いた人生の「すばらしいプログラム」を自らの力によって実現しようとはかろうている姿です。

それは自分一人を高みに上げようという自己愛（利己主義）、驕慢心、そこから劣等感、嫉妬心が生まれ、孤独や差別を生み出していくのです。ところが、今日の日本人の生きる姿は、こういう生き方が普通であり、それに何の疑問も感ぜず、教育もこの点に反省もありません。ところが、ここから生まれる利己主義、高慢心、孤独、差別などが、深刻な人間の状況をもたらし、社会そのものが病んできています。

世間は自力作善の生き方を押し進めてきました。それが戦後の教育の一つの特徴であろうと思えます。個性を伸ばす教育という美名の下で。

本願他力をたのむ生き方に私たちは心を寄せることが急務であります。私を本当に生かすのは、私の願いや個人的な人生設計を、私の努力で実現することによってではなく、私を根底から真に生かそうとする本願他力に私の人生をゆだね、本願他力からの願いにしたがって、本願他力に生かされることによつて、真の人生は実現するのだということ親鸞聖人は仰せられるのです。その上で、私が縁あつて、自分の個人的な能力を磨いたり、自分の能力を用いて世の中のお役に立たせただけによいのです。人生は、私の個人的な願いをかなえることを第一のことにしては、本当には生きられないことを阿弥陀の本願はつけているのです。